あいさつ

東山梨教育協議会
会長　廣瀬　芳樹

東山梨教育協議会の研究の成果を収録した「東山梨教育研究」が,今回で第５８号の発刊となります。この収録は,昭和３８年の創刊以来,多くの先輩方により引き継がれ,ゆるぎない土台の上に築きあげられてきた研究実践であり,さらに児童生徒のより良き成長を目指し教育三者が一体となり進めてきた他県には見られない貴重な組織研究の成果でもあります。昨年５月１日より元号が令和になりました。「東山梨教育研究」は,昭和,平成,そして令和へと受け継がれた私たち東山梨教育に携わる教職員の大切な財産と言えるでしょう。

まずは,日々ご多忙の中にもかかわらず,教育公務員の使命としての理論研究や実践研究を意欲的に積み上げてこられた全ての教協会員の皆様方,学年末のあわただしい中をこの収録の企画・執筆・編集にご尽力いただいた担当の先生方や峡東教育事務所の先生方に心より感謝いたします。

さて,超スマート社会などと呼ばれるこれからの世の中においては，日々，新しい知識や技術が生み出され，変化が激しく，常に新しい未知の課題に試行錯誤しながらも対応することが求められます。こういう時代においては，その時その時の，自分にとって必要な最新の知識や技術や考え方に気づき，学習方法を自分で探し，自ら学んでいくことが必要とされます。そのような時代を生き抜いていく子供たちを育てることを目指し，学校教育が大きく変わろうとしています。義務教育には，基礎的読解力や数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力等を全ての児童生徒が習得できるよう，新学習指導要領の着実な実施が求められます。これにより，全ての教科等の目標や内容が，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱に基づき再整理され，評価観点も全教科統一になり,「知識・技能」,「思考・判断・表現」,「主体的に学習に取り組む態度」となります。小学校の英語教育やプログラミング教育を含め対応すべき課題は多いです。

今後，学校教育は，「ゆとり教育」の時のような学力低下の批判を避けようと，中身は削らず「質も量も」の路線が取られます。しかし，その一方，世代交代に伴い，経験の少ない若手教員が増え労働時間が過労死ラインを超える教職員が相次ぐ中，働き方改革も進めなければならず，学校はアクセルとブレーキを同時に踏むことを求められています。

これからは，教師一人一人が改革意識を持ち，新たな時代の要請に適切に応えられる確かな教育ビジョンと実力を養い，日々実践に励むことが必要になるでしょう。本誌がその一助となり，また東山梨教育協議会の組織研究が更に充実し，教職員の皆様とともに進化していくことを願ってやみません。

終わりに,私たちの研究活動を物心両面にわたり支え,ご指導いただきました多くの方々に重ねてお礼申し上げ,あいさつといたします。